

「いう」と「おもう」の言語学

——複合辞を用いた日本語の主体・主観表現——

田中 寛

Abstract

“*iu*” (say) and “*omou*” (think) are basic words of Japanese. In this paper, I examine forms and usages of compound words consisting of “*iu*” and “*omou*”. First I discuss how “*iu*” is used in introducing quotations. By examining quotations with and without quotation marks, it is found that the quotation marks are essential for determining whether or not the quotations are spoken or thought in practice, but in the quotations (utterances) without quotation marks, it is not clear whether the utterances are spoken or thought in practice. In general, the basic function of “*to-omou*” is defined as showing the speaker’s unreliable information. The compound words consisting of “*to-iu*”, and “*to-omou*” are shown to express various meanings other than simple quotations.

キーワード：複合辞, 主観表現, 多機能性, 引用, 日本的言語発想

Keywords : compound words, subjective-expressions, multi-function, quotation, Japanese way of thinking

1. はじめに

言語の発想形式の根源を基本語彙に探ろうとするさまざまな試みのなかで、対比的な概念を手掛かりに検証しようとする方法がある。基本動詞では「する」と「なる」, 「ある」と「である」, 「する」と「である」, 名詞では形式名詞「こと」「もの」や「ところ」などがその代表例である。これらの行為や存在, 変化といった裡にひそむ意志性の有無, 個別性と普遍性は一方で〈ウチ〉と〈ソト〉といった文化論的概念にも敷衍され, 日本語論の重要な領域を構成する。こうしたキー概念による日本語論を言語学的に, さらに言語文化論的な立場からも再検証しようとするのが本稿の目的である。

発話動詞「いう」, 思考動詞「おもう」は動詞の中でもっとも使用頻度の高い基本動詞である。小西友七(1996)では英語の say と think の語法, 意味について詳細な分類と記述を行っている。日本語学では森田良行(1977)が「いう」と「おもう」を日本語の基本語彙として詳細な記述を試みている。このほか連体修飾構造にあらわれる「という」の機能をはじめ, 引用の観点から, さまざまな機能についての記述がある。一方, 「おもう」については, モダリティの一環として独自の機能を検証しようとする研究が多く見られる。しかしながら, 「いう」と「おもう」を対

比的に論じ、これを日本語表現の論理的構造として考察したものは、管見の限りでは二宮正之(1986)の論考があるのみである。二宮は次のように述べている。

人間が意識と言語をそなえた動物と定義されるなら、「おもう」と「いう」とは人間の根底をなす営みである。この二つの基本的な動詞をめぐって、日本語が主体となる《人称》を表現するうえで、どのような性質をもっているかを、できるだけ精緻にとらえるのが私の狙いであった。調べてみると、日本語が長い歴史を通じて、ゆるぎなく、きわめて精妙に、《私》と《私でないもの》とを区別していることがわかった。

(「いう」と「おもう」——日本語における主体表現の二方向)

この長い歴史とは、日本が外来文化を摂取する過程で、自他をどう峻別したか、という姿勢、戦略にも影を落としている。友愛と敵対、融和と覇権あるいは反発の歴史的過程において、個々の思考発想様式は醸成されていく。「私の個人主義」を語った夏目漱石以来の片付かない近代日本における「自我の確立」についても、二宮の視点はきわめて示唆的であるといえよう。《私》と《私でないもの》との峻別(あるいは相互排他)が「いう」と「おもう」の用法のなかにもどのように投影されているのか、——それらの検証によって日本人の、日本語の「自己」認識、あるいは主観性、客観性といった概念発想の様式も浮き彫りにされるであろう。

本稿では「いう」と「おもう」についてそれぞれの意味成分を再検討しながら、複合辞、すなわち文中の接続助詞相当成分、文末の助動詞相当成分にあらわれるいくつかの文型に注目し¹⁾、これらの文型の意味的構造的特徴を通して、日本語の主体表現、主観表現の本質にかかわる一端を考察してみたい。

2. 「いう」の意味と語彙的な用法

発話・伝達動詞の「いう」は具体的・実質的な意味を持ちながら、抽象的・機能的な用法も多く分布し、その全体的、本質的意味はいささか茫漠としているように思われる。「いう」はまた、「話す」「語る」「しゃべる」などの発話動詞のすべての性格をも有している。「言葉を発する・内容を伝える」という本来の意味は、「口に出す・伝える」という職能をもつ〈人主語〉の領域と、「伝える」という職能をもつ〈物主語〉の領域とに分割される。前者の「口に出す、伝える」という直接言語行動、発話行為が音声による具体的な対面行動を意図するのに対して、後者の「伝える」ことを二次的・間接的、あるいは最終的な目標とする側面は、「天気予報では～と言っている」など、伝聞・伝達による事項説明や抽象化した一種の判断表現として機能する。「と言える」などの評価判断は前者の「伝える」に収まるものと考えられる。

森田良行(1977: 57-59)では「表現行為に属する言語行動の一つ。音声を使う口頭表現の場合が多いが、「新聞でも社説で言っているように」と、書かれた表現にも用いる。発話としては、「話す、語る、しゃべる」に比べて概念が広く、それだけ具体性にかける」と述べている。しかし、「いう」のもう一方の評価判断的な機能についてはほとんど触れられていない。

また、小泉保他編(1989: 36-39)では「いう」を①から⑥までに分類している(用例は省略)。

即ち、①口を動かして言葉で表現する ②文章がある内容を表している ③一般に伝えられていることをそのように伝える ④人や物の名前を伝える ⑤ある言葉のある仕方で発言する、または、ある別の言葉で表現する ⑥何かが音を立てる といった用法であるが、⑤の主張もしくは表明といったモダリティ的な機能については詳細な検討が必要である。

以下、語彙的な用法をみたと、〔(と) いう〕を用いた複合辞から種々の表現形式をとりあげながら、日本語の主観表現、主体表現の特徴を検討してみたい²⁾。

2.1 「いう」の複合動詞

まず、語彙的な側面から、「いう」の特徴を表す複合動詞をみてみたい。

- (1) 言いあぐねる、言いあやまる、言い争う、言い表す、言いくく、言い替える、言い切る、言いくるめる、言い足す、言い出す、言い尽くす、言いつける、言い伝える、言い残す、言いふらす、言い淀む、…

このなかには実際の言語行動や具体的な発話行為に限らないものもふくまれる。さらに評価判断の用法として、「とは言い切れない」「言葉では言い表せない、言い尽くせない」などがある。「言い残す」も実際には発話内容でなくても生前の言行などをさし示すこともある。さらにこの中には、「言い替え」「言いつけ」「言い訳」「言い逃れ」「言い伝え」「言い差し」のようにある種の概念、方法を表す名詞成分となるものも少なくない。

- (2) a. 子どもは父親の言いつけを忠実に守った。
b. この村には古くからの言い伝えがある。
c. 娘は帰宅が遅くなったのをバスが来なかったと言い逃れをした。

また、「いう」を含む複合動詞は引用助詞「と」のほか、疑問節（「かどうか」など）、また間接話法「よう（に）」や補文「ことを」などを前接に擁する。

- (3) a. 周囲は彼のことを遊び人だと言いつらしている。
b. 娘は結婚の話をどう切り出すべきか、言いつらした。
c. 父は子どもに庭の草取りをするよう言いつけた。
d. 夫は帰宅時間が遅くなることを家人に言いつらした。

「と」引用節や疑問節は眼前の発話内容の総体（；現在層）を、「よう（に）」は様態（附帯）修飾の機能と交差しながら目的（；未来層）を、「ことを」は客体的な対象・素材（；既存層）を示す。このように「いう」は過去から現在、未来にわたって森羅万象を概括する思念伝達装置として機能している。

2.2 「いう」の文副詞的機能

次に句や節の単位としての機能をみていくと、いくつかの特徴的な分類が可能になる。

まず文副詞的な成分として、条件節や動詞のテ形を用いたものが観察される。内容の導入部分としての前置き表現で、聞き手に対する話し手の注目表示としても機能する³⁾。

- (4) 言い換えれば（換言すれば）、言ってみれば、言うなれば、逆に言えば、極論を言えば、もとはと言えば、欲を言えば、はっきり言ってしまうれば、言わせてもらえば、一言で言えば、よく言えば、悪く言えば、正直に言えば、結論を言えば、誤解を恐れずに言えば、…

「いう」を意味的に内包する「もとをただせば」「もとをたどれば」「ふりかえれば」「たとえば」「つけ加えれば」などもこの類に含まれる。「て」形を用いた文副詞も同様に用いられる。

(5) はっきり言って、端的に言って、一口に言って、正直言って、率直に言って、おおまかに言って、大雑把に言って、一般的に言って、常識的に言って、…

次は独立した用法で、挿入句、会話の応答、ターンなどに見られるものである。(6) は前置き、(7) は一種の応答表現の一部をなす。

(6) 言ったら悪いけど、言ったら何ですけど、言いますけどね、言っておきますが (いっとくけど)、言わせてもらえば、言われてみると、…

(7) よく言うね、言ったな、あなたはそう言いますが、言わないことではない、何を言うか、何と言うことを、言いたくないが、言うまでもなく、何と言ったらいいか、それを言っちゃあおしまいだ、…

こうした応答表現の一部としてあらわれる「(と) いう」は語の実質的な意味を残しながら、一般化、敷衍化の機能をになっている。

2.3 「いう」の指示的用法、接続詞的用法、挿入句的用法

「いう」は指示詞とともに修飾語を構成し、文脈的な指示を話し手・聞き手間に共有する。(8) はコ系を例にした連体詞としての機能である。一般にコ系が多くあらわれることに注目したい。

(8) こういう N, こういった N, これといった N, こういうような N, こういうふうな N, これとあって、…

また、「何という N」「どこといった N」のような非直示的な言い方もある。

(9) 何といても、誰が何といおうと、どことあって、どういうわけか、どういうはずみか、どういう意味か、どういう風の吹きまわしか、…

(10) は接続句としての機能がみられるものである。接続成分を兼務するものもある。

(10) そういうわけで (して)、そういうことで、そうかといって、かといって、そういう部分で、そういう点で、そういう意味で、そういえば、ということで、というより、というか、とはいうものの、とはいえ、…

とりわけ「そういう意味で」「そういうことで」「そういうわけで」は出現度が高く、前段内容を受けて、共有的知識情報として統括、収束に参画する。(11) は挿入句的なものである。

(11) 何というか、何といおうか、何といましようか、何というべきか、何といったらいいか、何といえればいいのだろうか、…

また、「X という X」の形で、総称的な指示機能を有する。

(12) a. 医者という医者；すべての医者

b. 今度という今度；今度こそ、

このほか、「という」には引用としての機能、および連体修飾構造にあらわれる「という」「とあった」の機能が広範に存在し、これまで多くの研究の対象とされてきたが、本稿では複合辞の用法を主眼とし、この引用と連体修飾の機能については考察の対象とはしない。

3. 接続成分にあらわれる「という」の諸相

本節では「という」を接続成分として用いた比較的顕著な用法を用例とともに観察する⁴⁾。このなかには動詞「いう」の実質性が残存しているものや、本来の意味が希薄になって機能的に用いられているものもある。

3.1 「X といえば」「X という」と

「という」を条件形の形に含むものに「といえば」「という」となどがある。「といえば」には連想や自己説明など複数の用法が観察される。

(13) a. 上野といえば桜, 温泉といえば草津。

b. ウエルメイドな短編といってしまうばそれまでだが, …

c. よくできているといえばできているが, 何か物足りないのも事実だ。

(14) 最近, 山田さんは研究会に出てきませんね。

——そう, 山田さんといえば (そういえば), 先週, ミナミで会いましたよ。

(15) 親しくしていたという室田さん夫妻も知らないというと, 鶴原さんは一体全体, どこにいたんでしょうね。(松本清張『ゼロの焦点』)

口語的な指示, 表明表現として「といたら」「という (の) なら」もある。

(16) a. ダメだといたらダメなんですよ。

b. どうしても行きたいというのなら, 行きなさい。

c. こうした手法で進めるというのなら, 時代錯誤もいいところだろう。

「という」とが「ということに (でも) なる」と「とすると」などのように, 想起を意味しながらの広義の主題形式として用いられることが多い。「ということにでもなれば」「ということでは」「ということなしに (は)」などもこの派生形と見なされる。

3.2 「X かといえば」「X かという」と

3.1 の拡張形式の一つは前件で話題にしたい内容を提起し, 後文で説明や理由づけを行う言い方である。「いえば」も「いうと」も同じように用いられるが, 前者のほうが必然性が高い。

(17) 貯まった金をどうするかというと, 小僧たちには冷飯を喰わせておいて, 和尚一人が毎晩祇園へ出かけて使っている。(『金閣寺』)

(18) どこがユニークかといえば, 他人, とくに同伴に対するその目はきわめてシビアで正確なのだそうである。(『心の危機管理術』)

(19) 債権者がたくさん押しかけてくる中で, 彼がどうしたかというと, 何もかも全部さらけだしたのである。(『心の危機管理術』)

(20) なぜ, 喜助が四カ月も村を出なかったかというと, 雪がふかかったためである。

(『越前竹人形』)

もう一つは前件でいったん, 述べたことを後件で打ち消して, それとは別の実際の局面や場面を逆接的に差し出す言い方である。(24) はやや慣用的な言い方である。

(21) 男はいまいましげに, 目をそむける。だが, いまいましい一方かというと, そうも言い

きれない。『砂の女』)

(22) 体力のある人が疲れないかかというと、 そうでもない。逆に、 体力もあまりなく、 おまけに何か持病をかかえている人が平気で仕事をこなしたりする。(『心の危機管理術』)

(23) けれども、 ボクも彼らと同じように、 休み時間が最も苦痛だったかかというと、 決してそんなことはなかった。(『五体不満足』)

(24) これまで周到な準備を重ねてきたが、 それでも試合を前にして、 不安がまったくなくかかといえば嘘になる。(多少はある)

次は慣用的なフレーズで、 (25a) は「何かにつけ」、 (25b) は「むしろ」という意味を表す。

(25) a. 彼は何かというと、 仕事の忙しさを理由にする。(??何かといえば)

b. 私はどちらかかといえば、 洋食よりは和食の方が好きだ。(どちらかというと)

3.3 「かといって」「そうかといって」

いったん述べたことと対比的な状況を持ち出してこういうケースもあるという意味を表す。文中であらわれることもあれば、 いったん、 文を言い切って補足する用法もある。

(26) オオカミの群れでも、 掟は厳しい。ここでも弱いものは追われ、 かといって、 みんなと離れることも必ずしも許されない。(『一人っ子の上手な育て方』)

(27) もともと、 友達のつきあいが入ったサークルで、 初めから4年間続けるつもりはなかった。かといって、 たった2ヵ月で辞めるつもりもなかったのだが。(『五体不満足』)

(28) つまり賛成派についてもいまさら先頭には立てないし、 そうかといって、 人の後につくのもしゃくなのだ(『百言一話』)

(29) 企業が工場の移転を決意した時点で跡地が果たして売れるかどうかは経営者自身にも見きわめがつかないことが多い。そうかといって跡地を他の工場に売却されたのでは、 過密地帯からの工場分散の効果はない。(『日本列島改造論』)

「(そう)かといって」が前掲3.2の「かというと」と共起的に用いられることがある。この場合、「(そう)かといって」は3.4でみる「からといって」の用法にも近い。

(30) 彼は酒を飲まない。そうかといって付き合いが悪いかといって、 そんなことはなく飲み会には必ず顔を出す。

(30) 彼は酒を飲まないからといって付き合いが悪いかといって、 そんなことはなく、 …

3.4 「Xからといって」「Xからって」「Xからとて」

原因理由をあげて、 それに必ずしも該当しない帰結を導くもので、 常識や思い込みを覆す内容が述べられる。後件文末には「とは限らない」「わけではない」「とはいえない」「というものではない」など、 一部否定の定型的な表現があらわれやすい。「Xからって」はくだけた言い方、「Xからとて」はフォーマルな言い方である。

(31) 医者の息子に生まれたからといって必ず医者にならなければならないといってはない。(医者にならないケースもありうる)

(32) a. 外出するのは面倒くさいからといって、 いつも家にいるのはよくない。

b. いくら忙しいからといって、 電話一本よこさないといってはないだらう。

- c. 一流大学を出たからと言って、一流会社に就職できるとは限らない。
- d. 余力があるからといって放置するのは無責任のそしりを免れまい。
- e. 自分に合わない(から) といってすぐ仕事を辞めるわけにはいかない。

次のように、「だからといって」は前文を受けて接続詞として機能することもある。

- (33) 中国電力は、意図的な不正ではなく、原子炉の安全性も損なわれていないという。だからといって、見過ごせる問題ではない。

3.5 「Xてからというもの」「それからというもの」

それまでとはまったく違う結果的状况、場面を明示し、意外性、驚き、感動などの気持ちを表す。「それからというもの」はその可展的な接続句である。

- (34) 脱出に失敗してからというもの、男はひどく慎重になっていた。（『砂の女』）
- (35) 通訳にはなれないまでも、せめてもう少し楽な事務所の仕事に就きたかった。そのためには、言葉を覚えなければならない。それからというもの、必死でロシア語の単語を覚える努力をした。（『心の危機管理術』）

3.6 「Xという段になって」「Xという以前に」

当該事態に直面した時点の特化した言い方として「という」が任意に介入する時間節がある。意志形をとまなう「ようという矢先に」「ようという前に」は「ようとする矢先に」「ようとする前に」のように「とする」も同じように用いられる。

- (36) a. これから食事をするという時になって、電話がかかってきた。
b. 彼の日本語力は論文を書くという以前に基礎的な力が不足している。
c. これから論文を書こうという前に、体調を崩してしまった。
d. いざ出かけようという矢先に、兄から長電話がかかってきた。

3.7 「Xといわんばかりに」

一種の比喩的な状況描写表現で、その動作・現象を臨場的に述べる言い方である。「Xばかりに」も同じ言い方である。文末成分として用いられることもある。

- (37) a. 黙れ、といわんばかりにその教師は学生をにらんだ。
(その教師は学生をにらみつけ、黙れ、といわんばかり(の形相)だった)
b. 待ってましたと(言わん)ばかりに、彼はマイクを持つや歌いはじめた。

3.8 「Xというけれども」「Xというが」

いわゆる伝聞形式を借りて、一般的な慣例をなぞるような場合に用いられる。格言、世間での言い回しなどがその対象となる。

- (38) 馬鹿は死ななきゃおらないというけど、まったくその通りだね。
- (39) 人間はふしぎに、一度罪を犯した所に戻ってくるというが、田沼久子の場合も、この心理に当てはまりそうだった。（松本清張『ゼロの焦点』）

3.9 「X といったところで」「X と（は）いいながら」「X と（は）いうものの」

逆接表現「ところで」「ながら」「ものの」に「という」をともなったもので、不満や意外性といったものを強調した言い方である。

- (40) a. 会話ができるといったところで、せいぜい日常会話ぐらいなものです。
 b. お金がないいいながら、彼女は旅行ばかり行っている。
 c. 3月になったというものの、まだ朝夕は冷え込みがきついです。

3.10 「X いうのに」「X といっても」「X といえども」「X とはいえ」

同じく、逆接の意味を押し出しながら、その内奥に間接的な要素を取り込み、「世間では～と言っているのに」という通念を引き合いにして現実の不確かさを述べる。一般に後文には意外性の強い文が置かれる。(41a), (41b) は基準・標準値以下を述べる言い方である。

- (41) a. 出て行ったまま二十分近くなるいうのに、まだ帰って来ない。
 b. 禊子は元日いうのに暗い用事で駆けつける自分が哀れになった。(『ゼロの焦点』)
 c. 真夏だいうのに、ぞくぞくするほど寒かった。(『黒い雨』)
 (42) a. 図書館いっても学校の図書室を大きくしたようなものだ。
 b. 辛い(は) いってもタイ料理ほどの辛さではない。
 (43) a. 経験がないといえども、彼はそれなりに努力している。
 b. よく準備したとはいえ、いざ発表の当日になると、うまく話せなかった。

このほか、「X いうにもかかわらず」などがある。

3.11 「X いうから」「X いうわけで」「X いうもので」「X いうことで」「X いうことから」

因果関係を表す順接表現「から」「わけで」「もので」などに「という」をともなったもので、ことさらに結論、結果に至った根拠や経緯を強調した言い方である。「X いうから」は「X いうんだから」のようにさらに強調されることもある。「X いうことから」は出自、出所に言及する場合などに用いられる。接続句「そういうことで」などは対話の終結部などに多用される。

- (44) a. 叔母が病気で手が足りないいうから私が勤めて遣ったのです。
 b. 夏には軽く 50 度を上回るいうから、まさに「死の谷」だ。
 c. 宿泊費込みで 3 万円いうんだから、安いほうでしょう。
 (45) a. この発言は民意を踏みにじるいうもので、沖縄人民を愚弄している。
 b. 家族が急に具合が悪くなったいうわけで、参加できなくなったのです。
 c. 今回はこの問題に踏み込まないいうことで、次の議題に進みたいと思います。
 d. 「そういうことで、じゃ、失礼します」(電話などの終結部分での挨拶)
 e. 東北出身いうことから、寒さには慣れていてでしょうねと言われる。

3.12 「X いうより (は)」

一種の比較表現で、X よりも後項の優位性を認め、主張する言い方である。「X いうよりは Y といったほうが」の形式をとることが多い。対話では冒頭に用いて相手の意見を修正するような意見の提示として機能することも多い。

- (46) a. 彼は学者というより ジャアナリスト と いった方が 通用する 人物だ。
b. サッカーはスポーツ と いうよりも 格闘技だ という 印象 さえ 受ける。
c. 彼は主張している影, というよりは, 存在している影 そのもの だった。
d. 手伝っている というよりは 邪魔を している と いった ほうが 近い。
e. 彼は芸が細かい ね。
—— というより, 無駄が多い 感じが する だけ けど。

3.13 「X どうか」「X といおうか」

「X というより (は) むしろ Y」をほかして別の見解を差し出す言い方で、口語形では「X っ どうか」もよく用いられる。「X どうか」は「どちらかといえばむしろ」という選択の接続 詞的な機能を示す。「何 どうか」「何 といおうか」は釈然としない気持ちを表す。

- (47) 子どもたちの質問には いつも 驚かされる。 というよりも, 笑わされる。 素朴 と いうか, 観点 がおもしろい。(『五体不満足』)
(48) 奥さんにおうかがい しますが, 自殺 なさる ような 動機 と いうか, そんな 懸念 は な か つ た で し よ う ね。(『ゼロの焦点』)
(49) そして 私たち 離婚 した わ。 と いうか 私 の 方 から 無理 に 離婚 した の。(『ノルウェイの森』)
(50) できた時 もう うれしい で し よ う が, 何 と い い ま す か, いま, こ う, でき か か ら う と し て い る 時 も, い い 気 分 な も の で す ね。(『あした来る人』)
(51) これは 同時に, 村落 と か 職場 を 除 い て, 自分 の 社会 生活 の 場 を も つ て い な い と い う, 生 活 圏 と い お う か, 社会 学 的 場 の 単 純 性 ・ 単 一 性 (一 方 的 所 属) か ら く る も の で あ る。
(『適応の条件』)

3.14 「X といい Y といい」「X といわず Y といわず」

並列表現として複数の対象を例示、列挙しながら、発話意図としては、評価や習慣的行為を表す。「X といわず」は「と言わずに」「と言わずして」が並列列挙の用法として「だけでなく」の意味で用いられたものである。

- (52) わざわざ こんな 時期 に 駅 まで 迎 え に 来 て く れ た 態 度 と い い, 瞬間 に 見 せ る 彼 の 目 の 表 情 と い い, 禎 子 は 本 多 の 気 持 ち が, 何 な の か 感 じ て き た。(松本清張『ゼロの焦点』)
(53) けれども 階級 と い い 地 位 と い い, 現実 の 社会 では 人間 の本 質 より も 持 っ て い る 富 の 量 が 決 定 的 な 意 味 を も つ。(『青春の蹉跎』)
(54) 「我輩は君, これ でも 真 面 目 な ん だ よ」 と 敬 之 進 は, 額 と 言 わ ず, 頬 と 言 わ ず, 腮 と 言 わ ず, 両 手 で 自 分 の 顔 を 撫 で 廻 し た。(『破戒』)

3.15 「X どうか Y どうか」「X といおうか Y といおうか」

前掲 3.13 のように単独で用いることもあるが、多く並列表現をなし、判断に躊躇しつつ、ある一定のイメージ的な判断を述べる言い方である。

- (55) a. 面白い と いうか 不思議 と いうか, ま ず 普 通 じ ゃ な い の よ ね。(『ノルウェイの森』)
b. 食 い た く な い と い う の か, 持 っ て い な い と い う の か, 明 瞭 で は な い。(『野火』)

(56) お国自慢といおうか、味覚の相対性といおうか。(『マッテオ・リッチ伝』)

3.16 「Xからって(も)」「XからってYからって(も)」

ある判断の基準, 見地から見て事態を評価判断する言い方で, 並列形式になることも多い。「Xからみて(も)」「Xからしても」もほぼ同義である。

(57) 質, 内容からって(も), 現地駐在員といつでも交替できるようなシステムになっていることが望ましい。(『適応の条件』)

(58) 資金面からって(も)労力からって(も), この計画案には無理があるね。

3.17 「Xについては~, Yについては~」

「ては」の反復をもって変転の著しい様子を表す。「XたりYたり」の用法にも近い。並列用法とともに, 「いう」は実質的な発話主張が一定限度, 認められる。並列用法では「Xといったかと思えば(今度は)」のように「おもう」の機能とも重なりをもつ。

(59) 息子は新しい携帯が欲しいといっては親を困らせる。

(60) 娘は靴が欲しいといってはねだり, 旅行に行きたいといっては我儘を言う。

3.18 「Xというもの」「というもの」

基本的には「Xということは」の添加的, 補充的な言い方であるが, そこから発展して前文で述べたいきさつ, 経緯を後文で説明する際の接続的な機能を呈する。「それというもの」「というもの」のように後文の文頭に位置して, 「のだ」「からだ」でしめる言い方もある。

(61) 秋に水仙を買うというものも変なものだったが, 僕は昔から水仙の花が好きなのだ。

(『ノルウェイの森』)

(62) 「君の気持もわかるし, 君が困っている立場というものもわかる。(『金閣寺』)

(63) 行動が必要なときに, いつも私は言葉に気をとられている。それというもの, 私の口から言葉が出にくいので, それに気をとられて, 行動を忘れてしまうのだ。(『金閣寺』)

(64) 正直なところ私には, それほどの実感がなかった。というもの, 苦労したのは私だけでなく, 捕虜になった者全員が同じ環境にあったからである。(『心の危機管理術』)

3.19 「Xはいうまでもなく」「Xはいうも愚か」「Xはいうに及ばず」

並列表現の類型で, 「Xはもちろん」という典型をあげながら, その他の対象も視野に入れる言い方で, 一般に主体や事態の評価を表す。「Xはいうまでもない」のように文末成分にも用いられる。「いうまでもなく」のみ文頭にも用いられる。

(65) a. 外交官である父は英語は言うまでもなく独語も仏語もできた。

：言うまでもなく外交官である父は英語はできたし, 独語も仏語もできた。

b. 彼は勉強はいうにおよばず, スポーツも万能ときている。

c. 相手をけなすぐらいは言うも愚か, 奴らはもっと汚いことをやる連中だ。

このほか様態・附帯修飾節にあらわれる「という」として次のようなものがある。

(66) とういうように, とういったように, とういふうに, とういう具合に, とういった具合に, とう

た調子で、という格好で、という形で、という方向で、という趣旨で、という想定で、
という設定で、…

また、原因理由節、目的節にあらわれる「という」としては、

(67) というので、という名目で、という事情で、という理由で、という口実で、という目的で、
というからには、という以上、というだけに、というだけあって、という背景から、と
いう経緯から、ということから、…

などが、さらに、累加・添加、並列節にあらわれる「という」には、

(68) というだけでなく、というばかりではなく、という以外に、というほかに、…

などがあるが、いずれも紙面の都合から割愛する。

4. 文末成分にあらわれる「という」の用法と意味

文末にあらわれる複合辞「という」について瞥見する。その多くが判断・評価、留保の気分、ためらい、逡巡などを表す。肯定形をとるものと否定形をとるものがある。総じて発話的な用法で、解説、あるいは説明的な文脈であらわれる。それぞれ個別的な用法について例文とともに記述を試みる。

4.1 「X という」「X ということだ」「X という話だ」「X という噂だ」

伝聞を表し、評判を含めた事態説明に用いられる。「X といわれる」「X といわれている」も同様の意味を表す。「X との噂だ」のように「との」も用いられる。

- (69) a. ここは年中、観光客がひきもきらないということだ。
b. この都市にも 5 年以内には地下鉄が走るという話だ。
c. 先生は甘いものが好きだというもっばらの噂です。
d. 背景には、女性を起用したいという鳩山内閣の強い意向があったといわれる。

4.2 「X という有様だ」「X といった状況だ」「X といった次第だ」

対象事態についての状態、いきさつを定位したものとしてとらえた言い方である。「有様」のほかにも「状況だ」「具合だ」「調子だ」「感じだ」「寸法だ」「魂胆だ」「算段だ」「始末だ」といった名詞述語成分が観察される。

- (70) a. 最近の彼ときたら食事は勿論、休息もろくにとれないといった有様だ。
b. 父が突然病に倒れまして、急きょ代理で参ったという次第です。

4.3 「X と (も) いえる」「X といえよう」「X といって (も) いい (くらいだ)」

可能表現、許容表現をもって、ある種の判断評価をなすものである。

- (71) a. 署名は他の保有国の動きを促す下地を作ったといえる。
b. 前代未聞の判断は、経営体質に対する厳しい問いかけだといえよう。
(72) a. 前田氏の引責辞職が今回、原中氏を押し上げた要因といっていい。
b. 真相を闇の中へ押しやったのは警察組織の病理が招いた失敗の連鎖だといっていい。

(73) むしろ裁判所の意識がようやく国民に追いついたという方が正確ではないか。

「という」「といえる」がベースになった文末のヴァリエーションは非常に多く、判断因子が多岐にわたることを示唆している。(74)はその類例の一部である。

(74) といえるのではないか、といえるだろうか、といえるのではないだろうか、といえなくもない、といえたものではない、といえないこともない、といってもよいだろう、といってもいいくらいだ、といってもいいのではないか、といいたくなる、といったほうがいい、…

このなかには聞き手に対する婉曲な態度もふくめ、判断留保をあらわす言い方も少なくない。

(75) といっちは語弊があるが、といったら言い過ぎだが、という嘘になるが、…

「Xといっ (も) いい (くらいだ)」は、そのように言ったとしても決して大げさではないという現実の一端を述べる、一種の評価判断の言い方である。

(76) a. 毎日毎日、犯罪事件のない日はないといっ (も) いい (くらいだ)。

b. 日本人は鮭がなければ生きていけないといっ (も) いい (くらいだ)。

このほか、「Xといたい」「Xといたくなる」も隣接した表出のスタイルをなす。

4.4 「Xとはいえない」「Xといえたものではない」「Xといえないこともない」

実際の状況に照らして見て、あるいは平均的な水準と比較してみて、従来の評判をくつがえすに十分な論拠を述べる言い方で、強い断定の語調をとまなう。「もの」のほかに「義理」「柄」といった名詞も用いられる。譲歩をあらわす「ものの」と共起する例もしばしば見られる。

(77) a. こればかりは終わってみなければ安心とはいえない。

b. 値段の高いものが必ずしもいい物とは言えない。

c. 難しいことは難しいが、あながち不可能とはいえない。

d. 写真や図面で見ればよく見えるが、実際にはとても博物館といえたものではない。

e. 情報交換や対策検討を行う仕組みが定着したものの、調整はまだ十分とはいえない。

「Xといえないこともない、Xといえなくもない」は、一部、論拠の信憑性が所在することを控えめに述べ、「ある面からいえば」という譲歩的、前提条件を内包する言い方である。

(78) a. 少年犯罪の多くは家庭環境に問題があるといえないこともない。

b. 地味ではあるが、見方によってはなかなかの傑作といえないこともない。

(79) 法人支配の日本社会は企業におんぶにだっただったのであり、負担はその裏返しといえなくもない。

4.5 「Xとばかりもいえない」「Xとまではいえない」「XともYとも(どちらとも)いえない」

「{とは/とも} かぎらない」と同様で、簡単には結論が下せない、という気持ちを表す。「とまではいかない」のような到達表現にもなる。「とは限らない」という一部否定の言い方でもある。「かならずしも」「あながち」などの否定誘導の副詞をとまなうことも多い。

(80) a. この事件では非行に走ったこともが悪いとばかりはいえない。

b. この仕事は楽そうに見えるけど、そうとばかりはいえないよ。

(81) a. 危険とまではいわないが、用心するに越したことはない。

- b. 娘の成績はいいとも(言えないが)悪いとも言えない。中間ぐらいか。

4.6 「X とはいいい切れない」 「X とはいいい難い」

同様に、一概に結論を下すことを憚った言い方で、同時に一種の留保的、例外を示唆した言い方である。しばしば「かならずしも」「あながち」などの副詞をとまなう。感単には結論を下せない状況にあることを表す。「X ともいいきれない」のように婉曲に言う場合もある。

(82) a. 遭難者はまだ発見されてはいないが、あながち絶望とはいいい切れない。

b. 医療技術は日進月歩だが、それでも十分だとはいいい切れない。

(83) その意図はまったく異なるとしても、それが明らかに存在している限り、同じパターン
のあやまちを犯さないともいいきれないのである。

(84) その意図はまったく異なるとしても、それが明らかに存在している限り、同じパターン
のあやまちを犯さないとはいいいきれないのである。(『適応の条件』)

「X とはいいいがたい」も一概に結論を下せない状況にあることを意味する。

(85) a. 人々がいま「治安の回復」を実感しているとはいいいがたい。

b. それはもはや地球温暖化問題の解決策のひとつとはいいいがたい。

c. 改革の理念は政権や与党内でも共有されているとはいいい難い。

4.7 「X ということになる」 「X ということにはならない」

結果招来の表現で、一定の評価、位置付けが述べられる。名詞文「X は Y だ」, 「X は Y ではない」であらわされる情報を新規に提供するという意図を有する。「こと」は特別な事態をあらわす。「なる」は最終的にそうした結論に落ち着く、といった気持も表す。「れば」節や「から」節との併用が観察される。(86d) のように条件節にあらわれることもある。

(86) a. 完成すればアジアで最初の 15 万人スタジアムということになる。

b. 入った連絡によると、父は来週、手術をするということになった。

c. 社内で海外に赴任しなければならないということになった。

d. 留学するということにでもなれば、相当の学費がかかるのは当然だ。

否定表現「X ということにはならない」はただちに恒常的な等価関係が成立しえないことを暗示する言い方となる。「だからといって～ということにはならない」は定型的な言い方である。

(87) a. 毎回出席したから(と違って)単位がもらえるということにはならない。

b. もんじゅを動かさないという選択肢は現実的ではない。だからといって、実証炉へと開発を進めていいということにはならない。

4.8 「X ということにする」

「ことにする」は一種の総括的な判断表現で、周囲の一般的な状況を見定めたのちの提案ともなっている。「という」を付加することで、より概括的な姿勢を表す。会議での司会進行などにあらわれやすい。

(88) a. 皆さんのご意見をうかがってから採決するということにします。

b. では、3000 万円で和解したということにいたしましょう。

- c. ここで、例の剽窃問題はなかった、ということにしませんか。

4.9 「Xということはない」

状況否定表現で、断定的に述べる。ある種の普遍的な状況が述べられる。人の性格に関しては、「こと」の代わりに「ところ」も用いられる。「という {こと/ところ} を知らない」という言い方も見られる。(89b) はやや定型的なものである。

- (89) a. 彼はぶれない男で、いくら批判されても怯むということがない。
 b. 予防の大切さはいくら強調してもしすぎるということはない。

4.10 「Xいうところだ」「Xといったところだ」

「ところ」は状況を意味する。正確には言えないものの、ほぼ「といえる」という結果判断を表す。解説的な言い方で動詞の意志形に後接することもある。

- (90) a. まもなく第二集団は先頭集団に追いつこうというところですよ。
 b. この勢いでいけば、大関でも狙おうかといったところですよ。

「という」よりも蓋然性をほかした「といった」のほうが好まれる。「ところ」は「とこ」あるいは「感じ」にもなる。成行きや成果をほかしたり、謙遜して言う場合もある。文末尾に終助詞的に「かね」「かな」「でしょうか」などの不確定要素をとまなうことも多い。

- (91) a. 英会話は苦手でして、日常会話ぐらいがせいぜいといったところですよ。
 b. いろいろな困難もあったが、やるべきはやったといったところですかね。
 c. うちの犬は15歳、人間で言えば立派な老人といったとこかな。
 d. 先生もホッと一息といったところだったが、このことによって別の問題が起こる。

4.11 「Xというほどのこともない/ことでもない」「Xというほどのものではない/ものでもない」

「といっても」と共起しながら、世間一般で言われているほどの程度ではないという評価・判断を表す。「といっても」「ままで」などとも共起する。「こと」には「こともない」「ことでもない」があるのに対して「もの」には「ものではない」の否定形しかない。

- (92) a. 碁が上手だといっても、名人というほどのことでもない。
 b. 具合が悪いといっても、すぐに入院というほどのことでもない。
 c. 当然のことはしたままで、別に特別のことはしたというほどでもない。
 d. 使えないというほどのものでもないが、決して使いやすいとはいえない。

4.12 「Xというものだ」「Xというものではない」「Xというものでもない」

ある事態の達成時に、それまでの経緯を振り返って感慨深げに述べたり、一方、必ずしも料簡通りにはならないこと、諦念的な気分を述べたりする言い方である。「まさしく」「とりもなおさず」「それこそ」などの副詞で強調されることもある。

- (93) a. 菅氏が扱って立つ考え方は、「…景気はよくなる」というものだ。
 b. 研究の内容は戦後における日中経済交流史を明らかにしようというものだ。
 (94) a. 40歳で店が持てたのだから、苦勞した甲斐もあったというものだ。

- b. 風景がなければ、せめて風景画でも見たいというのが、人情というものだろう。
- c. 良いこともあれば悪いこともある。それが人生というものだ。
- d. 外国人だからといって部屋を貸さないのは、それこそ偏見というものだ。

(95) それを聞いたとき賢一郎は、重い鉄の鎖に足をからまれた気がした。これが女というもののだ。永遠に男の足にからまりついて放れない、女というものなのだ。(『青春の蹉跎』)

(96) 国会で追及を受け、ようやく枝野幸男行政刷新相が対応し始めたが、(これでは)「政治主導」の看板が泣くというものだ。

一方、「からといって」などと共起する否定表現は「ものではない」よりも「ものでもない」「ものでもあるまい」のような婉曲な表現が用いられる傾向がある。

- (97) a. 論文はただたくさん書けばいいというものではない。
b. 食事は腹さえ満たせれば味はどうでもよいものでもあるまい。
c. たくさんお金があるからと言って、幸せになれるものでもない。
- (98) もちろん、抽象された理論と現実の社会の諸現象の間には、相当なずれがみられるのであり、これらの理論が西欧社会にそのままあてはめられるものではない。
- (99) 都立高校の受験制度というのは、試験当日の点数さえよければいいものではない。(『五体不満足』)

4.13 「Xというわけだ」「Xというわけではない」「Xというわけでもない」

「Xというわけだ」は事態・事情発生の背景を推論しつつ説明するもので、否定形はそうした説明の信憑性に関して必ずしも依拠しない姿勢、例外をも認める言い方である。

- (100) a. それで、彼女は離婚を決意したというわけですか。
b. 易しいことは易しいが、誰でもできるというわけではない。
 - (101a) のように「Xというわけではない」が後文の「というほどではない」と、あるいは(101b)のように前文の「からといって」などと共起するケースもある。「Xとはいえない」「Xとは限らない」とほぼ同義である。「必ずしも」「まるっきり」などの副詞とも共起することが多い。
 - (101) a. 刺身は嫌いというわけではないが、進んで食べるというほどでもない。
b. 長く英国に住んでいたからと言って、必ずしも英国の文化を知っているというわけではない。
 - (102) あのこれみよがしの仰仰しい国旗掲揚式もまるっきり役に立たないというわけではないのだ。(『ノルウェイの森』)
 - (103) いま直ぐというわけではない。婚約だけして置いて、あとは適当な時期まで仲良くやっていてくれればいいのだ。(『青春の蹉跎』)
- 「かといって」とともに修正を施したり、並列表現によって弁明的に用いられることがある。
- (104) 特別温かくもないが、といって決して冷たいというわけでもない。
 - (105) べつにとりたてて親切な一家というわけでもないし、べつにそのことで人望があるというでもないんだけれど、(『五体不満足』)

4.14 「Xというわけにはいかない」「Xというわけにもいかない」

予想した通りには簡単にことは進まないという現実、それにその背景にはなおいくつかの課題、問題が存在することを示唆する言い方である。

- (106) a. 今まで何とかやってきたが、この先、順風漫帆というわけにもいかない。
b. 後続が追ってきているので、これで安心というわけにはいかない。
c. 財政不足ははっきりしている。あれもこれも、というわけにはいかない。

- (107) 会社というのは、当然ながら、自分の好きな仕事だけをしていれ**ばすむというわけにはいかない。**(『危機の管理術』)

前掲「Xというわけではない」と同様、「からといって」「からって」と共起するケースも少なくない。

- (108) その相手に逃げられたからって、今更元の鞘におさまって、店を貰いますというわけにもいかないし、…(『あした来る人』)

4.15 「Xといわなければならない」「Xといわざるをえない」

一種の弁明的な説明表現で、当然の気持ちを表す。「Xというにふさわしい」「Xというにやぶさかではない」なども同類である。

- (109) 因みにこの物語に出てくる福井県は、日本でも随一の肺病県といわれているほどだった。
もっとも対策のおくれているところといわねばならない。(『越前竹人形』)

「Xといわざるをえない」は「仕方がない」という、一種の諦念を表す表現である。

- (110) 客観的にみると、学者にあっても真理の追求より、人間関係のリチュアルのほうが優先している、といわざるをえない。
(111) 私の同僚たちは、このような回答を貴下から受け取ろうとは期待していなかったと言わざるを得ない。

4.16 「Xというほか(は)ない」「Xというしかない」「Xとしかいいようがない」「Xといわれても仕方がない」

当面の評価が一定の根拠を有して、当然であると認める言い方。現状を受け入れざるを得ない消極的な評価を意味する。強い断定を表すこともある。

- (112) a. 政策判断より政局判断を優先した、後ろ向きの「裁定というほかない。」
b. 政権交代後の総理辞職ときは、皮肉というほかはない。
c. 相撲界の不祥事を目にして、「懲りない面々」とでも言うしかない。」
d. 民主党のドタバタ劇は有権者を見くびっているというしかない。

「Xとしかいいようがない」はこれらの強調した言い方である。

- (113) 私は汽車に信頼した。これは可笑しい言い方だ。可笑しい言い方だが、自分の位置が京都駅から少しずつ遠ざかり移動してゆくという、この信じられぬ思いを保証するには、そうとしか言いようがない。(『金閣寺』)

- (114) ひとくちに言って、ばかだとしか思えなかった。馬鹿野郎としか言いようがない。

(『青春の蹉跎』)

(115) 本案は「中小企業をいじめるような法案」と言われても仕方がない。

4.17 「X といっちはいられない」「X といっちはばからない」

「X どころではない」という深刻な事態にある状況を主張する。「X とばかりもいっちはいられない」のように「ばかり」を用いることもある。反対に「X といっちはばからない」は、積極的な主張の維持を表す。

(116) これを古今東西に通じる人類普遍の病理などと言っちはいられない。

(117) 首脳部の政局統投といっちはばからない声に党内からも批判が噴出している。

4.18 「X というのか」「X というのだろう」「X というのだろうか」

不特定多数の聞き手に向けて問題を提起する言い方で、疑念を強く押し出す。疑問詞や「いったい」「本当に」などの副詞をともなう。「とでも」のように「でも」をともなうことも多い。

(118) 今後、道路の維持管理費だけでも膨らみ続けるのに、新たな道路建設費用をいったい誰に負担させようというのか。

(119) a. こんな状態になろうとはいったい誰が想像したというのだろう。

b. いつ今の失業問題、自殺問題が解決されるというのだろうか。

4.19 「X といっっても過言ではない」「X といっってもいい過ぎではない」

当為当然を主張する評価説明の表現で、明らかな事実、状況を差し出す言い方である。

(120) 「なり代わり」投票は、その趣旨を土足で踏みにじる行為であり、参院の自殺行為といっっても過言ではない。

(121) この一連の早稲田の動きも、木谷さんに焚き付けられて、ここまで来たといっってもいい過ぎではない。（『五体不満足』）

4.20 「X はいうまでもない」「X はいうもまたない」

当該事態の存在、発生の現実を受け入れざるをえない状況を表す。

(122) すべての社員の健康が会社にとって大切なはいうまでもないが、中でもキーポイントが中間管理職だろう。（『心の危機管理術』）

(123) 社会というものは動態であり、いったん設定されたモデルもつねに修正を加えられる運命にあることはいうまでもない。（『タテ社会の人間関係』）

「X はいうにおよばない」なども同様の意味を表す。

4.21 「X といったらありゃしない」「X といったらない」

「といったらありゃしない」の前文には引用される文相当の成分が置かれる。これに対して、「といったらない」の前文には一般に名詞句が置かれる。「ない」は「表現する言葉がない」「尋常ではない」といった意味である。

(124) a. 残念だといったらありゃしない。

b. 日本に来たばかりの頃の心細さといったらなかった。

後者のほうが詠嘆的で、とくに「こと」は「素晴らしいこと」のような名詞文の詠嘆的特徴を引きずっている。「といたら」は「ときたら」とも言い換えられる。いずれも「は」の拡張ないし強調で、広義主題化形式のひとつである。

(125) あいつの図々しさ {といたら/ときたら} 並みではない。

さらに、「という」の介在した形式としては「という保証はない」「というつもりはない」「というおぼえはない」「といったためしがない」「という手はない」「という術はない」などの否定表現が多く見られるが、それらの用法意味については割愛する。

5. 「おもう」の意味の本質

「おもう」もまた、思考・判断を表す「いう」とともに、重要な伝達機能になる。本質的な意味を「頭を働かせる」として、「考える」と「思う」に二分類されるが、森田良行(1977:139-141)では「判断・決心・推量・願望・想像・回想・恋慕などの対象として、人・物・事柄などを取り上げ、それについて心を働かせる」と述べている。具体的には「思考する」のほかにも「検討する」「予期する」「意図する」「思いつく」「評価する」「信じる」「恐れる」などのさまざまな意味を呈する。また、小泉保他編(1989:105-107)では、①物事について、判断・予測・願望・決心といった精神活動を行う。②ある人物や事柄に心を引かれたり、気にかかったりする、という二点を挙げている。

まず、複合動詞では、次のようなものがあり、「おもう」の本質を探る手掛かりとなる。

(126) 思い出す、思いきる、思い残す、思いつく、思いたつ、思い悩む、思いあぐねる、思い悩む、思いとどまる、思いがけず、思い切つて、…

名詞「思い」を用いた連語的な慣用句としては次のようなものがある。

(127) 思いを寄せる、思いをめぐらす、思いを凝らす、思いを晴らす、思いを述べる、思いを語る、思いを馳せる、思いにひたる、思いをいたす、…

語義的な記述の面で言えば「思う」と「感じる」、「気がする」、「痛感する」、「認識する」「とされる」、また「考える」「恐れる」「懸念する」「心配する」などをはじめ、思考と感情の交差する表現についても比較検討する必要があるが、ここでは省略する⁵⁾。思考は「人間は考える葦」(パスカル)であり、また「我思う、ゆえに我あり」(デカルト)のごとく存在の基盤である。よって「思考」は「思う」ことと「考える」ことを峻別することはできない。「考える」は「思う」の間隙を埋めている。(128)はそうした例として夏目漱石の『それから』の一節である。

(128) 「三十になって遊民として、のらくらしているのは、如何にも不体裁だな」

代助は決してのらくらしているとは思わない。ただ、職業のために汚されない内容の多い時間を有する、上等人種と自分を考えているだけである。(『それから』三)

6. 接続成分に見られる「おもう」の意味と用法

本節では「という」でみたのと同じように、「おもう」「とおもう」が一種の機能語として文法化の比較的進んだ形式をみていくことにする。まず、接続成分として、主として瞬間性を表

す形式として、動詞「おもう」を成分とする複合辞の一群を検証する。「と思うと」「と思ったら」のように動詞「思う」が条件形後置詞となって機能し、後文生起の必須的な前提となるものである。この「と思うと」「と思ったら」には多義性が見られ、さらに「と思えば」には前者のふたつとは異なったふるまいを見せる固有の用法もある。

6.1 「Xかと思うと」「Xかと思えば」「Xかと思ったら」の多義的な用法

「思う」の文法化した用法のひとつで、複数の意味が観察される。まず、前件と後件のそれぞれの事態が、瞬間的な時間差で継起する様子を表す。話し手による主観的観察で、描写表現でありながら、恐怖や驚き安心などを表す⁶⁾。

- (129) a. 上空でピカッと光ったかと思うと、落雷が耳をつんざいた。
b. 岡田さんは受話器を置いたかと思うと、慌てて部屋を出て行った。
c. 父は横になったかと思ったら、ぐうぐう鼾をかいて寝てしまった。

引用の「と」の前のカは任意で一般に強調を表す。実際の用例では「消滅」のほか、「出現」も見られる。さらに前件と後件の事態が対照的な内容で、その反復行為、現象の転移がめまぐるしいさまを表す。総じて、意外性、不満やいらだちなどの様子を表す。

- (130) a. さっき泣いていたと思ったら、もう笑っている。おかしな子だ。
b. ついこの間新学期が始まったかと思ったら、もう中間試験の準備だ。
c. 廊下の電気は点いたかと思えば消え、消えたかと思えばまた点く。

このなかには、「XたりYたり」で表される反復現象が顕著である。

次に後件には感情的な表現がきて、前件の事態につられて抱く感情が表わされる言い方があられる。後文は情景描写にとどまらず、話し手の心的な内実を表す。感情の期待、失望などが表わされる。「(思う)につけ」といった習慣性にみられる感情の喚起、生起を表す。

- (131) a. 両親に叱られるのではないかと思うと、なかなか話を切り出せない。
b. こんな新入社員が入ったのかと思うと、腹立たしくなる。
c. 嵐のなかをよく生還できたものだと思うと、今だに信じられない。
d. 明日、国に帰れるかと思うと、興奮してなかなか寝付けぬ。
e. もう二度と会えないかと思うと、淋しさが込み上げて来ました。

次のように意外性の容認「とは」に近い感慨が表わされることもある。

- (132) こんな問題も解けないかと思うと、我ながら嫌になる。
⇒こんな問題も解けないとは、我ながら嫌になる。

「Xことを思うと」「Xことを思えば」が同じように用いられることがある。

- (133) a. 厳しい生活の中で、成功したことを思うと、感慨にたえない。
b. 昔、大変苦勞したことを思えば、これぐらいは我慢できるはずだ。

さらに、顕著な用法がいくつか観察される。一つは次に展開する予想以上の急変事態を表す。前件から後件への移行は予想以上の短時間であることを表している。感情の介入が顕著であり、タラ節のほうが一般的で、「と思うと」「と思えば」は不自然になる。

- (134) ポツポツ降り出したと思ったら、バケツをひっくり返したような豪雨になった。

次の「と思ったら」は逆接の意味を含みつつ、一般にノニに置き換えられる。前件で想定し

た事態とはまったく別の事態の生起を表す。「と思っていたら」のようにテイル形が、また後件には「実は」「結果は」などの副詞をとまうことがある。

(135) a. 遊びにでも出かけたと思ったら, (実は) 部屋で寝ていた。

b. 試験はもっと難しいだろうと思っていたら, 案外やさしかった。

このなかには思い違い、勘違いのようなケースもある。S1 と S2 が正反対、若しくは異質の性格のもので、発見的内容を表している。

(136) a. 今日は日曜日かと思ったら, 土曜日だった。

b. 普通の会社員だろうと思ったら, とんでもない著名な作家だった。

c. この絵は普通の画家が描いたのかと思ったら, (意外にも) 有名な画家のものだった。

次のように意外な事態でありながら、当然の事態を確認する気持ちで用いられるケースもある。後件には「案の定」「道理で」などの副詞があらわれやすい。

(137) a. 気分が悪いと思ったら, どうりで熱が38度もあった。

b. 今度の試験は聴解が難しいだろうと思っていたら, 実際その通りだった。

c. こんなことで、砂にさからえると思ったら, 大間違いさ。

次も「かと思ったら」だけが使えて「かと思うと」「かと思えば」が適切さを欠くケースである。

(138) a. どこへいったかと思ったら, そんなところにいたのか。

b. 何を話し出すやらと思ったら, いきなり金を貸してくれ, だとは。

一方、「かと思えば」「かと思うと」には対比、並列の用法があらわれやすい。「S1 し S2 し」に置き換えられる性質のものである。

(139) a. 彼女は煙草を吸うかと思えば, 酒も飲む。(煙草も吸えば酒も飲む)

⇒彼女は煙草も吸うし, 酒も飲む。

b. 円高で懐が潤っている人がいるかと思うと, 円高のおかげで自殺に追い込まれる人もいる。⇒円高で懐が潤っている人がいるし,

次は気持の移り変わりなど、変化、変転の著しい様子を表す用法である。

(140) a. 尻の落ち着かない奴で、来たと思ったら, すぐ帰っていった。

b. 桃の花が咲いたかと思うと, もう散って今度は桜の花だよりだ。

c. 彼女は楽しそうにしゃべっていたかと思ったら, 急に黙りこくって涙を流し始めた。

事態の継起や展開のめまぐるしさを表すケースもある。

(141) a. 妻の病気が治ったかと思えば, 今度は夫が新型インフルエンザときた。

b. この患者を診終わったかと思うと, こんどはこちらの患者を診なければならない。

c. 切り立つ岩を抜けたかと思うと, こんどは今度は断崖絶壁の線路を走る。

実際の用例をみると、全体としては批判的な表現が多くみられる。

(142) もちろん首相が嘆くように, 法案の採決を急いだかと思えば, 拒否に転じたりと対応をくるくる変える民主党の態度は無責任のそしりを免れまい。(朝日新聞 08.11.20)

「かと思えば, 反対に」のように、現状が話し手の予想に反している事態を表す。「かと思ったら」「かと思うと」も同じように用いられる。意味的に異なる事態の並列表現となっている。「一方(で)」「X タリ Y タリ」で表すことが可能である。

(143) a. 一日1枚も書けない日があるかと思えば, 10枚以上書ける日もある。

- b. 一日1枚も書けない日がある一方で、10枚以上書ける日もある。
- c. 一日1枚も書けない日があったり10枚以上書ける日もあったりする。

接続句「そうかと思うと、かと思うと」「そうかと思えば、かと思えば」は、「一方で」という意味で、談話的な展開における意外な情報の追加提供といった状況をあらわす。

(144) 部長は最近、調子が悪いみたいだね。

— そうかと思うと、先週は毎晩のように飲んでいましたね。(; そうかという)
これは既出の「(そう)かという」とも近い意味を表す。「Xと思う間もなく」は「Xと思うと」に近い言い方で、前件事態の発生から後件事態の発生までの間隔が相応に短い状況を表す。

(145) a. 冷たい雨が降ってきたと思う間もなく、雪に変わった。

b. 帰って来たと思う間もなく、息子は遊びに出かけた。

「Xと思っていたら」はそれまでの思いこみや通念が覆される状況を示す。

(146) ボクは、「メガネの掛け方・外し方に、カッコイイもカッコ悪いもないだろう」と思っていたら、反対側から、「超ハンサムじゃん」という声が。(『五体不満足』)

なお、次のような「と」は、「と思うと」の省略形と見なされる。

(147) 産業廃棄物をはじめとするごみ対策は、各自治体に任されているようであるが、このままでよいのかと、甚だ憂慮に堪えない。(毎日 1999/7/18)

6.2 「X(か)と思いきや」の意味と用法

基本的には「かと思うと」と同じ意味用法を有するが、やや古めかしい言い方である。瞬間を表わしながら、逆接を含意する。結果は意外性、想定外の事態を表わす。後件には「実は」「結局」「さにあらず」などの副詞をとともなうことが多い。

(148) a. 領収書を受け取ったと思いきや、実は請求書だった。

b. 交渉は短時間で妥結するかと思いきや、結局一か月もかかってしまった。

c. あっさり断られるかと思いきや、さにあらず、快く承諾してくれた。

d. 一件着落したかと思いきや、またひとつ次から次へ難題が発生した。

「Xと思っていたところが」「Xと思っていたのが」のような逆転の状況を表す。展開の逆転に対する話者の驚き、落胆、失望などを表す。既成概念や、予定・予想を覆すような事態発生がもたらされる。通常は動詞のル形、タ形につくが、形容詞にもつく。

(149) a. やっと間に合ったと思いきや、無情にも電車は出てしまった。

b. 今日是一日中雨かと思いきや、朝から雲一つないいい天気だ。

次は、ある状況を脱してもなお、連続して別の困難な事態に遭遇するような場面である。

(150) a. 風邪が何とか治ったかと思いきや、こんどはお腹を壊してしまった。

b. やっと洗濯物が片付いたと思いきや、また息子は服を汚して帰って来た。

c. これで勝ったと思いきや、5分後にはまた点をリードされた。

d. 合格したと思いきや、何と違う受験番号を見ていた。

「Xと思いきや」のほかにも「Xと見るや」も用いられるが、この場合はむしろプラス的な積極的な事態の展開が意図される。前述の「やいなや」で述べた用法の派生的な形式で、「主文には「何と」「突然」、「実は」などの副詞が共起しやすい。

(151) チャンスと見るや、我がチームは一気に相手陣営を攻め立てた。

6.3 「Xかと思う {ほど/くらい}」「Xかと思われる {ほど/くらい}」

「まるで～と錯覚するほどに」という様態修飾句をなす。

- (152) a. 時計が止まっているのかと思うほど、時間が経つのが遅く感じられる。
b. 息子の背丈は私を追い抜くのではと思われるほど急に伸びてきた。
c. レーダーには計器の故障かと思われるほどの異常な黒点が現れた。

6.4 「X思いで」「X思いから」「X思いに」

「思いで」は「やっとの思いで」「血のにじむような思いで」「呆然とした思いで」「ほっとした思いで」「やり切れない思いで」「ほぞをかむ思いで」「いっその思いで」「必死の思いで」「千秋の思いで」などのように副詞フレーズとして用いられる。

- (153) a. 「渡りに船です」と僕は雀躍りする思いで云った。
b. あなたを安心させたいという思いで知らせにやってきました。
(154) 全神経をロープに托し、蜘蛛の糸で星をひきよせるような思いで、そっと手元に引きよせた。(『砂の女』)

「思いから」は「生じる」「出発する」など、起点を思わせる内容が示される。

- (155) 中学・高校を通して憧れていた弁護士も、「弱い立場の人を救いたい」という思いからではなく、そのカッコよさ、収入の多さから来る憧れだった。(『五体不満足』)

「思いに」は「に」の原因理由の意味を受け、「さいなまれる」「悩まされる」などの受身表現のほか、(158) (159) のように「襲われる」「かられる」「ひたる」などの慣用的なフレーズもある。

- (156) 寺が寝静まる。私は金閣に一人になる。月のさし入らぬところにいると、金閣の重い豪華な闇が私を包んでいるという思いに恍惚となった。(『金閣寺』)
(157) ぐるぐる廻りながら、その夜明を待ち焦れた私は、永久に暗い夜が続くのではなからうかという思いに悩まされました。(『こころ』)
(158) 何か、たまらない恥ずかしい思いに襲われた時に、あの奇妙な、あ、という幽かな叫び声が出るものなのだ。(『斜陽』)
(159) 舞鶴へ向かう船中、帰国の喜びと同時に、敗戦後の日本でどう生きていけばいいのかという不安な思いにかられていた。(『心の危機管理術』)

6.5 「Xと違って」

ある気持ちを抑えられずに、何かの目的を遂行する様子を表す。「思う」を省略して「と」のみで表わされることもある。

- (160) 梶が話している間、曾根は電話を聞いては失礼かと思っ、椅子から立ちあがって、窓から外を見ていた。(『あした来る人』)
(161) 隠居さんは僕が戦局に詳しく通じていると思っ、話をしに来たのではない。重大放送のことが気になるので、ただ話相手を誰かほしかったのだ。『黒い雨』
(162) そうか、ボク受験番号は6446だったのか、と思っ、受験票を取り出して確認するが、

やはりそこには4664と印刷されていた。（『五体不満足』）

7. 文末成分にあらわれる「おもう」の用法と意味

「いう」が一般にその場の一回性的な、臨時的、部分的な営為をつかさどるのに対して、「我思う、ゆえに我あり」というように、「思う」は存在の証であり、全体的、普遍的な意味を内包する。したがって、自己存在論あるいは自我主張として、「と私は思う、思いたい」といった文末述語が好まれることも多い。日本語の判断表現のひとつの範疇として心的姿勢がどのように投影されているか、「おもう」を用いた文末表現について、実際の用例とともにみてみよう⁷⁾。

7.1 「と思う」文末形式

「と思う」を用いた文末形式は非常に多様で、「と思っている」「とは思わなかった」「とは思わない」「たいと思う」「よと思う」「ればと思う」「と思わざるを得ない」「と思われる」「と思えなくもない」「か（な）と思う」「とは思えない」「ではないかと思う」「と思った方がいい」など、さまざまな形態を有する。

(163) 土曜に授業を」という人たちは、背後の家庭の存在をどう考えているのかと思う。

(164) 就活に精を出すのは自由ですが、魅力ある授業で学生を育てるのが、大学の、そして積極的に学ぶのが学生の、あるべき姿だと私は思いたいです。

また人称制限も顕著で、「思う」のもつ表現上の領域、縄張りの本質を表している。

(165) a. 私は来年、留学する |と思う／と思っている。

b. 私は来年、留学したい |と思う／と思っている。

c. 私は来年、留学しよう |と思う／と思っている。

一人称の場合は「思う」も「思っている」も用いられるが、(166)のように第三者では「思う」の主体は話し手であり、内容上の主語を表さない。「思っている」のようにテイル形で表わされることに注意しなければならない。

(166) a. 彼女は来年、結婚する |と（私は）思う／思っている。

b. 彼女は来年、結婚したい |と（私は）思う／思っている。

c. 彼女は来年、結婚しよう |と（私は）思う／思っている。

以下では、こうした「と思う」を用いた文末形式の特徴を記述する。

7.2 「Xと思うばかり」

「思う」ことの当該の常態を表す。「ばかり」は「だけ」という限定を表すこともある。また「ばかりでなく」のように文中で添加も表すことがある。

(167) しかし彼は現在の自分を誇らしく思うばかりで、客観的な冷たい眼で自分を反省する気持はもっていなかった。そのことに一つの誤りを犯していた。（『青春の蹉跎』）

(168) 経済学者でもあり、財界人でもあり、政治家でもあるようだが、むしろ幅の広い文化人といった方が一番通りそうである。八千代がそう思うばかりでなく、新聞などに出る彼の肩書も区々である。（『あした来る人』）

7.3 「X ればと思う」「X ればと」

レバ条件節を受ける「と思う」は、待ち望み的な希望、願望を表す。「ればいい」という主文の「いい」や「ならない」などが省略されたもので、さらに (171) のように「X ればと (思っ^て)」の形で用いられることもある。

(169) 何か読むものがあればと思っ^たが、病室には本も雑誌も新聞も何もなかった。カレンダーが壁にかかっているだけだった。(『ノルウェイの森』)

(170) 帰りに彼は自分の人格のあまり上品でないことを反省した。自分は杉子の夫に値しないものだ、勉強しなければと思っ^た。(『友情』)

(171) 行政官たちが役割上 (また個々の集団の民間人より展望がきくという特典もあって) 何とか、少し取り締まらなければと、ちょっと案を出そうとすると、「官僚統制」「憲法違反」「権威主義」などと恐るべき言葉ではねかえってくる。(『タテ社会の人間関係』)

レバ節のほか、タラ節も同様に用いられる。

(172) それにしても杏子はまだ来ない! 克平は何回となく待合室を見回した。ちょっとでいいから杏子が顔を出してくれたらと思っ^た。(『あした来る人』)

(173) 喜助はもっとながい時間を玉枝の部屋ですごせたらと残念に思った。(『越前竹人形』)

7.4 「X と思える」「X と思われる」

「X と思える」は意志的、主体的、能動的、主観的な感じがある。また「思える」は「言える」の表す判断の意味に接近する。

(174) 杏子は、向うから、克平を訪ねて来た、これも登山家ではないかと思える素朴な感じの人物の姿が見えた時、その席を離れた。

(175) まるで腰をがっしりと固めるための成長の一過程が何かの事情でとばされてしまったんじゃないかと思えるくらいの華著な腰だった。

(176) 「でも最近になってこれでいいんだと思えるようになってきたのよ」と緑は言った。

これに対して「X と思われる」は自発的、受動的、客観的で、「考えられる」「想像される」「みられる」「される」などと類義的である。しばしば「か」「もの」などをともなう。この「か」は一般化への問題提起、「もの」は普遍性を表す。

(177) 私も立ち上り、後向きに駆けた。土手の草は、その上に自分の影がうつるかと思われるほど、明るかった。

(178) こうした家族の住居における行動様式の違いは、個人のパーソナリティの形成、ならびに人間関係のあり方に大きな影響を及ぼすものと思われる。

なお、(179) では「と思う」が現象的なコトとして、「と思われる」が事態的なモノとして用いられている点が特徴的である。

(179) a. ご家族の皆様もお元気でお過ごしのことと存じます。(：思います)

b. 犯人は車で名古屋方面へ逃走したものと思われる。(：判断される、予想される)

7.5 「X ように思う」「X ように思える」「X ように思われる」

「おもう」は「と」のほか「ように」節に後続することが少なくない。感想や印象を述べつつ、

「いくぶん」という抑制の気持ちをこめた判断である。同時に個人的な判断を敷衍した言い方にもなっている。

- (180) 三宅は良い男だし、僕はあのロマンティズムは好きなんだが、自分たちの能力を過信していたように思うね。(『青春の蹉跎』)
- (181) しかしいずれにせよ、僕は強くなろうと決心した。それ以外に僕のとる道はないように思えるからだ、と僕は書いた。(『ノルウェイの森』)
- (182) ある場所、ある時間において、戦争は、人間の意識の中にしかない奇怪な精神的事件のように思われるのであった。(『金閣寺』)
- (183) 日本社会におけるほど、極端に論理が無視され、感情が横行している日常生活はないように思われる。(『タテ社会の人間関係』)

7.6 「Xとは思えない」「Xとは思われない」

一方、否定表現を見ると、「と思えない」「とは思われない」の双方が成立する。「思えない」は主観性が強く、「どうしても」という自己内発的な表出を表す。

- (184) いざ口を開くと女の子とは思えないほどの気の強さで、男子からも恐れられているような子だった。
- (185) 僕はずっと話していてあなたに何か変わったところがあるとは思えないんですが、一方の「とは思われない」は結果からみた事態を重視しており、客観的、外発的な観察判断で、「だれがみても」という一般通念的な評価を含んでいる。
- (186) これでは、両者は依然としてすれ違っており、どうみても生産的、建設的な方法とは思われないのである

7.7 「Xとしか思えない」「Xとしか思われない」「Xと思うしかない」

とりたてて詞「しか」が「思う」にかかり、さらに否定と呼応する限定表現で、比較的強い評価判断を表す。「思えない」「思われない」には特別な相違点は見られない。「どうしても」「どうみても」「どう考えても」といった副詞句も共起しやすい。同じく主体側からの主意的判断である7.8の「と思わざるを得ない」と比較すると、積極的な認知判断を表す。

- (187) 母の滋乃に経済の実権を持たせないでおくところなどは、八千代には父がどうしても吝嗇であるとしか思えないが、とって別段出し惜しみかいするわけでもない。
(『あした来る人』)
- (188) この流れは、何なのだろう。恐ろしいほどの力が働いているとしか思えない。とくに宗教を信仰しているわけではないボクでも、神の存在を信じざるをえないほどだった。
(『五体不満足』)
- 「いう」の文末表現「としか言いようがない」とほぼ同じ表現とみなされる。なお、「しか」が否定にかかるべく移動した「思うしかない」もこれとほぼ同じ言い方で、「(今となっては)思うまでだ、思うのみだ」のように話し手の意志を限定した表現である。

- (189) 身内のことだからこちらの苦しみを察して力になってくれると思うしかないのである。
(『越前竹人形』)

ほかに類義表現として、「と思うほかない」「と思うよりほかに仕方がない」なども、現状ではそう思わざるを得ない心境にあることを示す。

(190) 登山家というものは、大方そんなことばかりやっている人種なのであろう。そうとでも思うよりほか仕方がなかった。(『あした来る人』)

7.8 「Xと思わざるを得ない」「Xと思われても仕方がない」

「と思わざるを得ない」も「と言わざるを得ない」と同様に不可抗力的な状況にあって内発的な感情の表出を表す。前述の「と思われても仕方がない」が外発的な事態に触発されたものとするれば、これは主体内部側からの判断で、事態の消極的な「やむを得ない」情報受諾を表す。

(191) 慈念の生活をみていると、禅寺の修行というもののはつらいものだな、と里子は思わざるを得ない。(『雁の寺』)

(192) しかしながら、神経質体格の強い私は、その後も相変わらずコンプレックスが強く、自分の欠点を隠して過ごしてきた。人によいところだけを見せようと、ずいぶんムダなエネルギーを費やしてきたものだと、今になってつくづく思わざるを得ない。
(『心の危機管理術』)

7.9 「Xと思えばいい」「Xと思えば思えなくもない」

結果的には「Xと思うしかない」と同じような婉曲的な判断を表す。「Xと思うしかない」とくらべて幾分、積極的な気持ちを表す。

(193) 「中毒したっていいじゃあないか。飯と同じように、毎日食べなければならぬ食物だと思えばいい。飯を食わんと、人間は生きていられん。毎日食べる。睡眠薬も同様に考えればいい。飯と同じように毎日寝る前に食べるものだと思えばいい。」(『あした来る人』)

(194) 若い女として御嬢さんは思慮に富んだ方でしたけれども、その若い女に共通な私の嫌なところも、あると思えば思えなくもなかったのです。(『ころ』)

7.10 「Xように思えてならない」「Xように思われてならない」

「思えてならない」「思われてならない」は一種の不可抗力的な、また自発寄りの表現で、恒常的認識の表明である。「思える」も「思われる」もほとんどニュアンスの差はない。

(195) 核廃絶を唱える日本政府の姿勢は単なるジェスチャーだけなのか。こうした無神経さが、日本を戦争へと導く下地となるように思えてならない。(毎日 1999/4/30)

(196) …と、笑いながらおっしゃったけれども、私には、お母さまが嘘をついていらっしゃるように思われてならないのだ。(『斜陽』)

「ように」を前接することが一般的である。また、「(ように)思われて仕方がない」も思念や印象の傾向を強調するものである。

(197) 彼は待っていると云ったまま、すぐ私の前の空席に腰を卸しました。すると私は気が散って急に雑誌が読めなくなりました。何だかKの胸に一物があって、談判でもしに來られたように思われて仕方がないのです。(『ころ』)

一方、「と思われても仕方がない」「と思われては仕方がない」は複文構造をなして主文で話し

手の後悔や諦念を表して、後述の「と思わざるを得ない」に接近し、シテ形接続の「仕方がない」とは意味が大きく異なる。

(198) いかにも、出版の話ができ上がってしまったので、急にいい気になって、ずばらを決め込んでしまったと思われても仕方がない。(『あした来る人』)

(199) 看護師らがほとんど受け入れられないようでは、相手国から「だまされた」と思われても仕方がない。(朝日新聞 2010/3/31)

7.11 「Xを思わせる」「Xと思わせる」

「春を思わせる陽気」などのように「思わせる」は「考えさせる」と同様に、そのような気持ちに誘い込む状況を表す。「のような」と結果的には類義的である。

(200) 食糧不足で食うことに一心だから無理もない。握飯は半麦飯，大豆飯，菜飯，キラズ飯などで，おかずは沢庵である。さっきの押しあいへしあいが，どんなものであったかを思わせる。(『黒い雨』)

「と思わせるほど（／くらい）」のように，程度節にあらわれる場合がある。

(201) 休火山が活火山に変わる初期の状態はそんなだろうと思わせるほど，烈しく歌が噴き出してくるようであった。(『サラダ記念日』)

7.12 「X思いだ」「X思いだった」

「思いだ」は「気だ」「感じた」などとほぼ同じ用法で，固定，定位した思想感情や印象，心地を表明する。「後ろ髪を引かれる思い」などの慣用的な表現も少なくない。

(202) a. 積年の鬱憤を晴らす勝利に，溜飲の下がる思いだった。

b. 至れり尽くせりの対応に，頭の下がる思いだ。

c. 恥ずかしくて穴があったら入りたい思いだった。

(203) 広島に着いて駅前の中幕のなかで兵隊さんに聞きまして，広島一中の生徒は全滅したことが分かりました。私は胸が引裂ける思いでした。(『黒い雨』)

(204) もうひと働きするどころか，このまま痩せ続け二〇キロ台に落ち，本当に死んでしまうのでは……暗澹たる思いだった。(『心の危機管理術』)

(205) 喜多村先生にしてみれば，ごく当たり前の普段のお話をされたのだろうが，聞く私にとってそれは文字どおり目のさめるような思いだった。(『五体不満足』)

「思い」が次のように固定した対象物，客体としてあらわれるものもある。

(206) そんな淡い遠い思いだったら，私はこんなに苦しまず，次第にあなたを忘れて行く事が出来たでしょう。(『斜陽』)

(207) きこの私の物語は，あしたの私の物語へとうたいついでゆかれねばならないだろう。それが一冊をまとめおえた，いまの私の思いである。(『サラダ記念日』)

7.13 「X思いをする」「X思いがする」「X思いがある」

「思いだ」の類義表現として，「思いをする」はそういう経験をする，享受する結果になる，といった意味を表す。「する」は「経験する」という意味である。

- (208) a. あいつは家族を見捨てて自分だけいい思いをしている。
b. 会社勤めでは何度か悔しい思いをしたことがある。
c. 若いうちに勉強しておかないと、将来惨めな思いをするぞ。
d. これまでこんな不愉快な思いをしたことはない。経験する。
e. 親にしてみれば子どもには不自由な思いをさせたくない。

「思いをする」とともに用いられる形容詞としては、「嫌な、窮屈な、辛い、苦しい、寂しい、恥ずかしい、肩身の狭い」などがある。(210)は慣用的な言いまわしである。

- (209) ボクの星座である牡羊座の今日の運勢が「大勢の人の前で、恥ずかしい思いをする」というもの。(『五体不満足』)

- (210) 「わたし嫌だわ。あんな所、二度と行きたくない。あんな思いをする位なら、死んだ方がいい。」(『青春の蹉跎』)

「思いがする」あるいは「心地がする」は「気がする」「感じがする」とほぼ同義で、感覚的な状況を重視した事態認定、観察のありようを示す。

- (211) a. 15分しか待たないのに、1時間も待ったような思いがする。
b. 熱のこもった彼の話の聞いていると、心まで癒される思いがした。
c. 母の境遇を思うにつけ、不安で身を焼かれる思いがする。

- (212) 「ほんとだ。」と、目を閉じているとその熱が頭に沁み渡って、島村はじかに生きている思いがするのだった。(『雪国』)

「思いがある」は、そうした感慨を抱いているといった主張を留保する状態を表す。多くが「という」「との」の引用詞を必要とする。

- (213) a. 私もこのままですませたくないという思いはある。
b. 私には現在の生活を変えたくないとの強い思いがある。

- (214) 部下を持つ立場の人でも、その部下に対してバカにされたくないという思いがあると、つい権威をカサにものを用ようになる。

こうした「思い」はもはや思考、思念の母体感情ではなく、表層的な「心地」「気持ち」といった意味を表す。次の例では独立した述語成分「私の偽らざる思い」「国民の切実な思い」であり、モーダルな「思いだ」とはいくぶん趣きを異にしている。

- (215) …、そんな魅力にあふれる、諸国民から愛され、信頼される日本をつくりたい。これは私の偽らざる思いであります。(朝日新聞 2009/10/24)

- (216) かつて、高度経済成長の原動力となったのは、貧困から抜け出し、自らの生活や家族を守り、より安定した暮らしを実現したいという、国民の切実な思いでした。

こうした、いわば実質的な意味をこめた「思い」は接続成分の6.4でみたように文末述語の成分だけに縛られない。「思いで」「思いから」「思いに」などの文中の接続成分にもあられ、とりわけ「思いに」は「(との) 思いに駆られる」「(との) 思いを強くする」などの連語的構成をなす。

7.14 「Xと思うかもしれない」「Xと思うだろう」

〈聞き手〉と〈話し手〉の認識が整合された、いわゆる複合的なモダリティで、さしだされた事態内容を聞き手に注目させながら、その真偽をあらためて問う言い方である。「が」「けれども」

などの逆接の接続成分とともに用いられる。

(217) 急な話だとあなたは思うかもしれないけれど、これは前々からずっと考えていたことなのです。（『ノルウェイの森』）

(218) 初めての人が見たら、間違えて落ちてしまったのではないかと思うかもしれないが、この夏にずっと練習を重ねてきた、立派な「飛び込み」だ。（『五体不満足』）

次の「Xと思うだろう」は前文の「たら」節を受けた反事実条件文の主文にあらわれたもので、「思うだろうに」という待ち望み的な心情を表したものである。

(219) 鏡を借りなければ自分が見えないと人は思うだろうが、不具というものは、いつも鼻先につきつけられている鏡なのだ。（『金閣寺』）

「Xと思うだろうが」のほかに、「Xと思うだろう」の言い切りの形で「Xかもしれない」と同様に反事実条件を表したり、想像の範囲を表すものもある。

(220) 「あそこに転がっている、あの弁当を敵が見てくれないかなあ。あの握飯を見たら、敵はもう空襲に来なくてもいいと思うだろう。もうこれ以上の無駄ごと、止めにしてくれんかな。僕らの気持、わかってくれんかなあ」（『黒い雨』）

7.15 「Xだろうと思う」「Xかもしれないと思う」

前掲「Xと思うだろう」「Xと思うかもしれない」が〈聞き手〉と〈話し手〉の認識の整合を表したのに対して、前後を入れ替えた「だろうと思う」「かもしれないと思う」は世間一般の通念を含めた〈話し手〉の認識を補強したものである。

(221) 「貴方は、わたし以外の女の人にはさぞいい人だろうと思うんです。わたしの方も、貴方以外の人には素直だと思っうんです」（『あした来る人』）

(222) このインターネットという、家にいながらにして世界中を飛び回れるツールは、家のなかに閉じこもることを余儀なくされてきた人々にとって、画期的なものだろうと思う。（『五体不満足』）

(223) 先生にお願いがあるの。一生のお願いです。毎日寝たままで考えていました。あなたは反対するだろうと思うけど、でも、もう一度だけ私の気持を聞いて下さいね。

（『青春の蹉跎』）

(224) ふつう、新人社員はその会社が将来さらに発展こそすれ、つぶれることなど絶対にありえないと信じて入社してくる。それは当たり前で、つぶれるかもしれないと思う会社に自分の一生を託そうなどは誰も思うまい。（『心の危機管理術』）

(225) 冗談のつもりで言ったのだが、みんなあっさりとそれを信じてしまった。あまりにもあっさりとみんなが信じるのでそのうちに僕も本当にそうなのかもしれないと思うようになった。（『ノルウェイの森』）

7.16 「Xとは思いもよらない」「Xとは思ってもみない」「Xとは思いもしない」「Xとは思いもかけない」

直面した事態が予想外であったことを強調する言い方で、結果的には後悔や残念な気持ちを表す。前接には通常「とは」「なんて」によって発見された事態内容が述べられる。なお、文末

はほぼタ形に限定される。「ことなど」「のは」などの接続形態も見られる。

(226) 広島はもう無くなったのだ。それにしても広島という町が、こんな惨状で末路をつけるだろうとは思ってもよらなかった。(『黒い雨』)

(227) 横川橋の向側では火の手がまだ上っていた。風に煽られて、川向う一面に灼熱色の火焰が天に舞いあがっていた。近寄ることなど思いもよらなかった。(『黒い雨』)

(228) …、と比島人は私の手にある銃を見ながら、卑屈に笑った。その時私の口を突いて出たのは、私がそれまで思ってもみなかった、次の言葉であった。(『野火』)

副詞「まさか」「ついぞ」なども共起成分としてあらわれることがある。

(229) しかし今までついぞ思いもしなかったこの考えは、生れると同時に、忽ち力を増し、巨きさを増した。むしろ私がそれに包まれた。(『金閣寺』)

連続的なフレーズ「思いもかけない」は「思いもよらない」と同義である。

(230) ヨーロッパにいたならば思いもかけなかったような地理学者としてのリッチの姿が、シナではこうして表面に浮かびあがってきたのであった。(『マッテオ・リッチ伝』)

7.17 「X と (は) 思わないか」

一種の反語表現として聞き手に同意を求める言い方である。「そうであってしかるべきだ、そうあるはずだ」という当為主張が込められる。書き言葉よりは会話表現として表れやすい。

(231) 「そら来た。行為と来たぞ。しかし君の好きな美的なものは、認識に守られて眠りを貪っているものだと思わないかね。(『金閣寺』)

(232) 俺たちが突如として残虐になるのは、たとえばこんなうらかな春の午後、よく刈り込まれた芝生の上に、木洩れ陽の戯れているのをぼんやり眺めているときのような、そういう瞬間だと思わないかね。(『金閣寺』)

7.18 「思うに、X」

「(彼が) 言うには」と同じように、文頭に「思うに」を配して、以下にその内容を提示する言い方で、「(Xの) 思うところによれば」という前提・導入句である。「私が思うに」のように主語を明示する場合もあるが、省略することが多い。

(233) 思うに学校の先生になる人はどなたも、理想に燃え、教育に対する情熱と純粋な気持ちをもって奉職するのだろう。(『心の危機管理術』)

(234) 思うに大学は大学で自分の正義をもっているし、学生にも学生側の正義はある。つまり正義と正義とが喧嘩をしているんだよ。(『青春の蹉跎』)

8. おわりに

思考動詞、発話動詞は心理的、感情的な発話の一部を代弁する機能が観察される。間接的な表現のひとつの表徴でもあるが、同時に個の抑圧、不自由さの具現でもある。「いう」が具体的、個別的な事象を多く扱うとすれば、コト的であり、一次的、現象的、部分的、刹那的である。反対に、「おもう」は一般化、普遍化の指向性があり、モノ的な傾向が強い。これらの基層は「い

う」「おもう」の動詞のもつ本来の意味が増幅したものと意義づけられる（表1）。

表1 「いう」と「おもう」の対立関係

いう	現象・表層的	部分的	刹那的	〈する〉的	コト的	〈外発〉的
おもう	本質・深層的	全体的	普遍的	〈なる〉的	モノ的	〈内発〉的

つまり、「いう」が右脳的で事象的、具体的な領域であり、「おもう」が左脳的で抽象的、一般的な感覚をつかさどっていることになる。この両者のバランスのうえに、我々は主観、客観の本体把握のスケールを描き、言語行動、発話行為を営んでいるといつてよい。

「いう」も「おもう」もともに引用の助詞「と」をともなう伝達の機能をになう動詞であるが、同時に自己確認的な意味をももつ。日本語における主体の未分化、重層的な状況を象徴しているといえよう。自者と他者との関係性を築くうえでさまざまな障害や分水嶺を、「いう」や「おもう」によって整合化している。さらに本稿でみてきた複合化した複合辞という記述装置によって、日本語による日本語の主観論理的な構造を構築しているといえる。

本稿では認識とその表明に関わる「いう」と「おもう」の態様をめぐって、言語化された形式にもとづいて記述とその内奥にある意味本質について考察を続けてきた。「いう」は接続成分にも文末成分においても多くあらわれ、とりわけ「おもう」は文末成分において多岐に観察される。このことは「いう」が部分的、途上のであり、「おもう」が統括的、全体的な表現指向を示していることを暗にうかがわせるものである。また、文末成分における「いう」の一部はむしろ「おもう」に接近していることが観察された。表2は本稿で扱った代表的な用法（概数）であり、このほかにも派生形、複合形が複数、存在し得る。

表2 「(と) いう」「(と) おもう」の使用分布

	(と) いう	(と) おもう
文頭成分 (前置き表現)	彼が言うには	思えば、 思うに (は)
接続成分	43	10
文末成分	50	36

引用助詞「と」を用いながら「という」では内容自体の直接的な言及を意図し、「とおもう」では一般論的な拡張が意図され、主観から客観への過渡的な認識の所在が不透明であることをみてきた。「いう」にも「おもう」にも実質的な意味の希薄化にはいくつかのレベルがある。最近は「いえる」のほかに「いえてる」「いえている」, 「思う」のほかに「認識している」も汎濫している。進行形を用いたり、「いえる」や「認識する」という言葉を使ったりすることによって、自己確認と同時に聞き手の誘い込み・取り込みをも意図する。

たとえそれが明らかな事実であっても、断定表現を好まず、あるいは回避して「という」や「といわれる」「とされる」「と思われる」「と見られる」を使用する背景には、責任所在の曖昧化、ほかしが根底にあって、事態の本質を封印するという風潮を蔓延させることが少なくない。たとえば、次の説明文には「という」「といわれる」が多数使用されることによって、一部の証言は共有されておらず、いまだ事実解明には至らないことを暗に示唆しているように思われる。

結果的には読者に判断をゆだねるような書き方となり、信憑性に乏しく、主体性を欠いた文意になることが少なくない。

(235) …これらの恐ろしい実験に使用された人間は、主に中国人やソ連人、蒙古人などで、万が一協力しなかった場合は射殺されたという。また七三一部隊は実験のみならず、日本軍の各部隊と協力して前線にも出ていたといわれる。そして日中戦争時には、広範囲にわたって日頃の実験の成果を試していたという。七三一部隊は終戦時に資料の多くを焼却し、施設の大半を爆破した。さらに収容者は毒ガスで殺害し、死体はガソリンで焼却、骨はハルビン近くを流れる松花江に捨てたという。また、実験のためにペスト菌を投与された動物たちは一斉に放たれ、そのため付近の村ではペストが流行したという。戦後、重要資料の一部は石井四郎ら部隊幹部の手によって米軍に提供され、戦犯逃れの取引き材料にされたともいわれている。

(太平洋戦争研究会『キーワード日中全面戦争』人物往来社 2010) 意見や意向、見解を表明する文において、「個」としての見解、自己責任、主体性をどう打ち出すか、あるいは一般論としての提起にとどめるのか、さまざまな工夫が思量される。「とされる」「と思う」「と考える」などの認識動詞の述語構文はそれだけで、一定の立場を表明せざるをえない。またその乱用は日常言語の使用においてもある種、言語不信にもつながっていく恐れがないとはいえない。ここで首相の所信表明演説を例にとれば、その態様は具体性をおびてくる。

ちなみに鳩山首相の所信表明演説(2009.10.26)に見られる文末表現においては、次のような特徴が観察された。(数字は使用回数を示す)

(236) 「と考えます」(2)「と考えています」(2)「と考えております」(3),
「たいと思います」(1)「たいと思っています」(1)「たいと思っております」(2),
「と思っております」(1)「と思っています」(1)「とは思っておりません」(1)
「てまいります」(37)「ていきます」(1)「ていく所存です」(1)
「てまいりました」(5)
「なければなりません」(11)「ではありませんか」(5)

「思う」と「考える」の巧妙な配置組み立てに加え、「ます」「ています」「ております」の配置、さらには類出する「てまいる」「なければならぬ」が文脈の全体的な整合に参画する。新聞の社説などでは「と言う」を用いた接続、文末表現が多く見られたのに対して、講演やスピーチでは「と思う」「と考える」系が際立っている。前者が個々の場面に直面しての見解表明とすれば、後者は恒常的な見解表明で、「言う」と「思う」の峻別が意識されているといえる。さらに「思う」と「考える」の使い分けはいささか巧妙で、後者は「認識する」も含めて概念・論理的な引き伸ばしが可能である。「思う」は「したいと思う」の使用のように、これからの未来志向を表明する文脈において顕著である。「する」と言い切らずに「したいと思う」と敷衍するところに共同体的な意識があるのではないだろうか。さらに「ます」に対して「ています」「ております」の形は状態性や恒常性を前面に打ち出す企みがある⁸⁾。同じく鳩山演説からの引用である。

(237) ここまでの政治不信、国民の間に広がるあきらめの感情の責任は、必ずしも従来の与党だけにあったとは思っておりません。野党であった私たち自身も、自らの責任を自覚しながら問題の解決にとりくまなければならないと考えております。

- (238) 私は、政治と行政に対する国民の信頼を回復するために、行政の無駄や因習を改め、まずは政治家が率先して汗をかくことが重要だと考えております。
- (239) …、財源をきちんと確保しながら、子ども手当の創設、高校の実質無償化、奨学金の大幅な拡充などを進めていきたいと思っております。
- (240) それぞれの価値を共有することでつながっていく、新しい「きずな」をつくりたいと考えています。…、後世の歴史家から「21世紀の最初の10年が過ぎようとしていたあの時期に、30年後、50年後の日本を見据えた改革が断行された」と評価されるような、強く大きな志を持った政権を目指したいと思っています。

「いう」も「おもう」もコミュニケーションを重視する場面では有力な配慮表現を構成する。断定を避け、一般論として述べる表明文にはいまだ確立されない日本語における自我、自己確立の問題、迷走が色濃く潜んでいるように思えてならない。それだけに聞き手、読み手である情報受信者の側は、「いう」「おもう」の方略に賢明な注意を払う必要がある。

本稿の観察によって、「いう」のほうが「おもう」に比べて圧倒的に多くの形式を有することがあらためて確認された。「いう」の個別的、部分的、現象的な意味特徴の反映とみるべきであろう。以上、限られた事例の観察ではあったが、「という」「とおもう」の接続・文末成分にみられる表現形式を概観した。文末にあらわれる場合、結論や主張の提示という点では共通した意味機能が見られる。論理的な文章や、論説・報道文にどのようにあらわれるか、という制約条件については、今後より大きな言語データをベースに分析していく必要がある。

(2010年6月2日鳩山由紀夫首相辞任演説を聞きながら)

本稿は2010年4月3日に立命館大学衣笠校舎諒友館にて行われたヴァナキュラー文化研究会言語学部門ワークショップ「グローバリゼーションの中の日本語—その感性と活力—」で発表した原稿をもとにしている。発表の機会を与えてくださった関係者各位に対し、感謝申し上げます。

注

- 1) 複合辞とは複数の形態素がひとつのまとまりを形成し、一定の機能語的な成分となった表現単位をさす。近年、日本語文法学における複合辞研究については、藤田・山崎(2006)をはじめ、田中(2010)などがあげられる。また土屋他(2006)の研究、膨大な書き言葉を言語データとする国立国語研究所の取り組みも注目されている。これまでの個別的な記述研究については田中(2010)所収の文献目録を参照されたい。
- 2) 「言う」「話す」「しゃべる」「述べる」「語る」といった語彙的な意味分析についてはここではふれない。いずれ別稿での分析を用意したい。
- 3) 亀田千里(2003)は「言う」を用いた文副詞的機能に注目し、主としてレバ条件文の「えらびだし性」にもとづく表現機能において、一般のレバ条件文との比較を行っている。
- 4) 以下の用例は主として『中日対訳コーパス第一版』(北京日本学研究中心 2003)のほか新聞、小説などによった。なお、連続修飾にみられる「というN」の「という」の異形態として「ってN」「といたN」「とのN」があるが、ここではその異同については詳しく立ち入らない。
- 5) 「思う」は「認識する」「感じる」などを含む認識・思考動詞の基層をなすもので、構文化が進んだ機能的なふるまいをみせる。「(という)気がする」「気だ」「気になる」、「感じがする」「感じだ」「気持ちがある」「気持ちになる」「気持ちだ」「意向だ」なども含め、包括的な使用調査が望まれる。

- 6) 田中 (2010) では〈瞬間と同時を表す複合辞〉として「かと思うと」、「と思う間もなく」、「と思いきや」などを考察している。また、「いう」を用いた接続成分、文末成分をあげながら、引用の観点に立ってモダリティの空白を埋める複合辞として考察している。
- 7) 「思う」には認知的モダリティの「だろう」、また終助詞「かな」「かしら」などとの対照的考察を通じて、確認要求、情報伝達の機能的側面をさぐる研究が少なくない。田中 (2010) 所収文献目録を参照。
- 8) 渡邊ゆかり (2010) は国会での意見文に見られる「というふうに思います」などを統計的に観察しているが、他者を意識した日本語の主張表明文の特徴として注目される。

参考文献

- 小野正樹 (1999) 「ト思ウ」述語文の情報把握について 『筑波大学東西言語文化の類型的特別プロジェクト研究報告書2』
- 小野正樹 (2001) 「ト思う」述語文のコミュニケーション機能について 『日本語教育』110
- 亀田千里 (2003) 条件形式による注釈節の性格について 『日本語と日本文学』第37号 (筑波大学国語国文学会)
- 川端芳子 (2001) 条件形式を用いた表現「といえは／という」と 『立教大学日本語研究』8
- 小泉保他編 (1989) 『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
- 小西友七編 (1980) 『英語基本動詞辞典』研究社
- 小西友七 (1996) 『英語のしくみがわかる基本動詞24』研究社
- 砂川有里子 (2006) 「言う」を用いた複合辞：文文化の重層性に着目して 藤田保幸・山崎誠編『複合辞研究の現在』和泉書院
- 砂川有里子 (2006) 「言う」を用いた慣用表現—複合辞の意味記述を中心に— 倉島節尚編 (2006) 『日本語辞書の構築』おうふう
- 田中寛 (2010) 『複合辞からみた日本語文法の研究』ひつじ書房
- 土屋雅稔・宇津呂武仁・松吉俊・佐藤理史・中川聖一 (2006) 「日本語複合辞用例データベースの作成と分析」『情報処理学会論文誌』47-6
- 二宮正之 (1986) 「「いう」と「おもう」——日本語における主体表現の二方向」『言語生活』413号 1986-4 筑摩書房
- 藤田保幸 (1987) 「～トイウト」「～トイエバ」と「トイッテ」「～トイッテモ」複合辞に関する覚書 『国語国文学報』44 (愛知教育大学)
- 藤田保幸 (1998) 複合助辞「トイッテモ」「トイッテ」「トハイエ」について 『滋賀大國文』34
- 藤田保幸・山崎誠編著 (2006) 『複合辞研究の現在』和泉書院
- 松木正恵 (1997) 「と思うと」の連続性 『学術研究』国語・国文学編45 (早稲田大学教育学部)
- 松木正恵 (1998) 「思う」を中心とする接続形式について 『学術研究』(国語・国文学篇)46 (早稲田大学教育学部)
- 森田良行 (1977) 『基礎日本語I』角川書店
- 森山卓郎 (1992) 文末思考名詞「思う」をめぐって一文の意味としての主観性・客観性— 『日本語学』11-9 (明治書院)
- 森山卓郎 (2000) 「と言える」をめぐって—テキストにおける客観的妥当性の承認— 『言語研究』118 (日本言語学会)
- 宮崎和人 (1999) モダリティ論から見た「～と思う」 『待兼山論叢』33 (大阪大学)
- 宮崎和人 (2001) 動詞「思う」のモーダルな用法について 『現代日本語研究』8 (大阪大学)
- 渡辺由貴 (2007) 「と思う」による文末表現の口語性—近代の論説文を中心に— 『早稲田大学大学院文学研究科紀要第3分冊』52

渡邊ゆかり（2010）国会会議における意向・意見・見解表明文の変化『日本語学会平成二十二年度春季大会予稿集』

用例出典

『中日対訳コーパス第一版』北京日本学研究中心（2003）。以下は収録作品。『砂の女』（安部公房），『青春の蹉跎』（石川達三），『心の危機管理術』（宮田常男），『黒い雨』（井伏鱒二），『あした来る人』（井上靖），『野火』（大岡昇平），『金閣寺』（三島由紀夫），『ノルウェイの森』（村上春樹），『マッテオ・リッチ伝』（平川祐弘），『破戒』（島崎藤村），『雪国』（川端康成），『越前竹人形』『雁の寺』（水上勉），『斜陽』（太宰治），『サラダ記念日』（俵万智），『五体不満足』（乙武洋匡），『ころろ』『坊ちゃん』（夏目漱石），『タテ社会の人間関係』『適応の条件』（中根千枝）他。